

【人生の癒しと回復を望むあなたへ】

説教者: 鄭南哲牧師

本日聖書の箇所: ヨハネの福音書5章1節—9節(新約聖書)

(Rev. Jung nam-chul)

**\* 今週暗唱聖句「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださいましたからです。」(ヨハネの手紙第一 4章 19節)**

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族みなさん！一週間も主の平安の中で心と体、生活の日々の営みが守られましたか。ふけゆく今の秋の季節に、朝晩気温の温度差が激しいのです。始まった11月中にもコロナや風邪ひかないように共に気をつけましょう。そして、秋の季節は何よりも刈り取りの時期、収穫の時期です。今年の人生の歩みを振りかえて見ながら神様の御前で11月に感謝の刈り入れがたくさん豊かに溢れますように御名によって祝福し、切にお祈り申し上げます。

<本文の内容>

今日の御言葉の本文を読んで見ますと、イエス様がエルサレムに上られた時、羊の門の近くに、ヘブル語で**ベテスタ**(意味: **慈悲、あわれみの家**)と呼ばれた池で起こったお話です。

名前も知らない38年もの間、病気にかかっていたある一人が登場しています。聖書では、この人がどんな病にかかっていたのか、年齢もわからないため、いつから今の病気だったのか、はっきり出ていませんが、確かな事実は38年間の間も、今病気から何とか治る方法があれば、きっとさまざまな努力を尽くして来たと思われれます。しかし、いくらお金を使い、時間を使い、人が出来る力を出し切っても自分を苦しめるその病気と身の状態から変わりはありませんでした。ただただ彼が望んだのは、普通にみんなと同じように、生活をし、働きながら生きることを望んでいたと思いますが、いつのまにかもう生きる意欲もなくなり、自身の人生を恨みながら、歩けない哀れな自分の身と人生に対して愚痴話(ぐちばなし)で嘆きながら、苦しみと悩みの日々を過ごして来た彼に、ある日、この病人に糸筋(いとすじ)のような希望のうわさが聞こえて来ました。

エルサレム城にある羊の門の近くに**慈悲、あわれみの家**と名前の意味を持っている「ベテスタ」と呼ばれる池がありますが、その池の水がかき回された時があり、実はそれは天から御使いが降りて来ている尊い証拠なので、そのタイミングの時に、そのベテスタの池に入る人はどんな病気でも治って癒やされるという伝説の話でした。イエス様の時、ベテスタの水が温泉水だったという記録があるので、それで、地下から温泉水が突然湧き出て来た時、水がかき回す現象をそのように人々は物語のうわさを作り上げていたと思われれます。

その温泉水の成分のため、ある病のところは良くなる場合もあったはずですが、それではたしてすべての病が完全に癒やされたのか分かりません。とりあえず、歩けない彼は最後の希望をもって最後の力を出して、紆余曲折(うよきよくせつ)をへてやっとベテスタに着きました。

<1. 地上の paradisa のようなベテスタ & 絶望と死の入り口のベテスタ>

ようやくベテスタに着いてから、もう自分もここでちゃんと癒されて帰ることが出来ると思えばらくはとても幸せで大満足だったでしょう。希望に満ちていました。今だに立ち上がれなかった自分の人生が願った通りにいっきに自分のところを取り上げてすぐ歩けそうな自信感でいっぱいになったかも知れませんが、今までできなかった分、これからは自分の力でもできそうな日々の先が待っているような気がしたでしょう。

そしてベテスタに着いて周りを見ると、自分のように**肉体の病でひどく苦しんでいる人々ばかりだったので、今までかわった誰よりもここで集まっている人たちは自分の苦しさ、大変さを一番よく分かってくれる似てる人々ばかりだったので、みんな自分の味方で、他のところでは体験出来なかった非常に安心感も感じていた**と思います。このような意味として、この38年間も歩けなかった人にとってこのベテスタこそ最高の自分の居場所だとすぐ感じたのではないのでしょうか。もっと早くこのベテスタを知ってここに来てたら、もっと寂しくならず、良かったのにと悔しく思われるほど、ベテスタの池のところはまるで38年の病人自分にとっては人生の一番の最高の paradisa のようなところだったかも知れませんが。

## <絶望と死の入り口のベテスタ>

しかし、まもなくこの病人は気がついたかも知れません。このベテスタは人を救う場所、希望を与える場所ではなく、逆に残りの望みさえ消えさせる絶望や死の場所であることを。なぜそうだったのでしょうか。

みなさん、想像して見てください。病人は水がかき回された時に池に入ろうとしました。ところが、今までよく笑い合い、温かかった周りの多くの人たちの態度が突然変わってしまったのではありませんか。水が少しもかき回されると、だれ一人先に必死にそのベテスタの池に入ろうとした為、一瞬大騒ぎが起こり、みんなが冷酷な競争者になってしまいました。だれより自分の苦しみや人生の痛みを共感し、似てる体験をして来たベテスタでの多くの患者や病人たちこそ、自分をだれより一番理解し助けてくれる、自分の今までの苦しみに温かく共感してくれる一番の味方たちだと思っていたのに、水がかき回されると、一瞬みんな表情と態度も変わってしまい、だれもが自分の事じゃないことに一切関心もなく、この病人の為に当然その大勢いる中助けてくれる人は一人もいなかったのです。

かえて一斉に自分たちが先に入ろうとしたため、足を動けない彼がいくら上半身で必死に身を引かずってベテスタの池に近づこうとしても、早めに入ろうとする人々からぶつけられ、邪魔者のように押し付けられたり、踏まれたりしながら、今までどんなところよりもベテスタは冷酷で、残酷で、さらにひとりぼっちのようなどころであることをすぐ悟ったでしょう。ベテスタで今までこれほどまでに経験したことのない深い孤独とさびしさ、そして、絶望を感じていたのではありませんか。周りに自分のように病で苦しんでいた人たちもたくさんいましたが、その人たちさえも自分の癒やしのことが背一杯で、またいつベテスタの池の水がかき回されるかのみに実は一生懸命に注目していたわけでした。

本文の7節を見ると、彼が後、イエスに出会った時、彼がベテスタでどれほど、ベテスタとそこにいる人たちを恨んでいたのかイエス様にこう訴えていました。「病人は答えた。「主よ。水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に下(お)りて行くのです。」

もし隣の人は死んだら、いつのまにか彼も含め周りの人々の反応は悲しむより、‘よし！また一人の競争者(きょうそうしや)がいなくなったぞ！’見たいに、ベテスタの冷酷な雰囲気、周りの人が早く死んでほしいのを実はみんなが願っていた殺伐(さつぱつ)な場所だったとも思われます。ですから、時間が経つにつれ、その病人にとって、ベテスタはどんな病気でも、病でも直してくれるパラダイスのようなどころでは決してなく、さらに人を絶望に陥らせ、自分のみじめさを感じさせ、残っていた生きる自信と希望全てを失わせる死の場所だったことを痛感したでしょう。

また、いつ池の水がかき回るのか、ずっときりのない年月をベテスタで待ちながら、まったく先が見えず、きつとずっと外で寝泊りも続く生活の為、体も病もますますひどくなってしまったでしょう。もう彼は体も心の病も限界に達していたと思われれます。以前、ベテスタに来る前、自分の町に住んでいた地元の人たちこそ、心暖かく同情してくれた、少しも必要な物を施してくれて何とか頑張って生きられるように助けてくれた時と毎日比べつつ、今このベテスタに来たことを後悔し、周りの全ての人々や環境を恨んでいたのに間違いありません。

もう周りの人々が怖くなりました。もう彼にとっては、ベテスタは救いの道、慈悲の池ではまったくありません。

ますます人の命を奪おうとする地獄の入り口みたいなどころだけだと感じていたかも知れません。愛するクリスチャンプレイズ教会の信仰の家族のみなさん！ますますベテスタで命が消えていく状態の人生の絶壁の上に立ってもう落ちそうな状態の彼が、本文9節を読んで見ますと、「すぐにその人は直って、ところを取り上げて歩き出した」のです。

## <2. イエスキリストによる絶望から真の癒しと回復へ>

いったいどうしてそういうことが可能になったのですか。一生懸命に自分の力、努力で立ち上がろうとしてもむしろプレキ一なしの絶望の下り坂に飛び出していた彼を神の御子救い主なるイエスキリストが彼を癒やし、立ち上がらせて下さったのです。(8節—9節) 病で苦しんでいた彼の人生を立ち上がらせるために、イエス様がまず彼の方に尋ねて来て下さいました。(6節)「イエスは彼が横になっているのを見て、すでに長い間そうしているを知ると、彼に言われた。「良くなりた  
いか。」

ベテスダ池のエルサレムの向こうではユダヤ人の祭りで喜び踊り、騒(さわ)がしかったところに、イエス様は行かれませんでした。イエス様の関心は、たくさんの人々が集まって楽しんでいるそちらの方よりも、ベテスダの池の陰になっているあるところで顔を伏せて、身をうつぶせていた絶望の中で一番助けが必要な彼のところにありました！そして、イエス様の方から直接彼のところまで来て下さいました。

世の中誰も注目しなかったこの38年間の病人に神の御子なるイエス様がまず先にちかづいて来られたのです。

イエス様がまず哀れみをもってこの病人のところまで訪ねてくださいます。

今日のイエスキリストは他の癒しの御業をなされる時とはちょっと違いました。なぜならば、今日のこの病人は自分がまずイエスキリストを切に探したり、呼び求めたわけではなかったからです。

もっと正確に言いますと、今の病人にはもう一度イエスキリストの御もとに体を動かして行ける力すらも、切に呼び求める気力すらも、だれ一人イエス様にまでかつがれて連れて行ってくれる人も全然いない状態でした。

13節を読んで見ると、「しかし、癒された人は、それがだれであるかを知らなかった。」と書かれているのを通して、この病人はイエス様が何方であったかすら、全然知らなかったことが分かります。ですから、最初当然イエス様に対する信仰もあったわけでもなく、かえて自分はイエス様と出会える前まで神様から捨てられ、呪われた人生だと思い込んでいたかも知れません。何か自分か、親かひどい罪の天罰で、神は自分を呪い、自分が普通にも生きる資格すらない者として、造ったのではないか、神様からも、あきらめてしまわれ、捨てられた者なので、こんな病気となり、人々からも捨てられたと思い、実は、神様にまでうらみに思っていたと十分思われます。そんな彼にとってはイエス様に会おう何の準備もできてない状態でした。しかし、そんな彼だったのにもかかわらず、イエス様はわざわざその苦しみの中にいる彼を注目し、哀れみ深く見つめておられたイエス様はご自身から彼に尋ねて来られたのです。

#### <① 絶望のベテスダと救いのイエスキリストと対照>

愛する信仰の家族のみなさん！ここで、聖書は、ベテスダと救い主イエスキリストを対照(たいしょう)しています。

ベテスダは人の力ではどうしてもできない、立ち上がれない人生の病、苦しみ、うらみ、悩みなどの絶望を必死に人間の努力によってなんとか解放され、救われたくて作り上げたところでした。いつ、だれから始まったのかは分かりませんが、人の口から作り上げられ、伝えられて来たベテスダの伝説は、当時の多くの悩みや病にかかっていた人々が盲目的にただ従っていました。いったいいつベテスダの水がかき回されるのか全然わからずに、とりあえず限りがなく死ぬ時まで無念に待ち続けるべきところ、結局人をさらに絶望と死の影が覆われ、陥らせるところだったベテスダにイエスキリストが自ら来て下さいました。死の絶望の中に、人の力ではどうしようもできないその人に、救い主なるイエスキリストは、命と救いの御手をまず、差し伸べて下さって、彼を癒し、根本的な解決させ、真の回復を与えて下さいました。

愛する信仰の家族のみなさん！多くの時代が過ぎても、今日も、人々がこの世の中でベテスダのような場所や物や人や宗教を作り上げて、そこに必死に自分たちの力で熱心に拝みつつ頼っているのではありませんか。人は自分のベテスダを持つとします。日本中でもベテスダのようなところはどれほど、多いのでしょうか。人の人生を縛り付けている自分の悩み、苦しみ、痛み、罪、恨み、問題などから解放されるように一生懸命に努力し続けている多くの人々の姿を我々は周りによく見られます。まるでいつかは分からなまま、きっと何とか自分は良くなるという漠然とした希望をもっていながらも、そのうちにもっとひどくなってしまっている現代人の姿がしばしば見えます。しかし、今日イエス様はベテスダへの無駄な望みによって絶望の絶壁(ぜっぺき)に立っていた38年間の病人の前に現れて下さいました。

それで病人ははじめて自分の前に立てておられる主を見上げることが出来ました。今までずっと無駄に向いていたベテスダから、自分のまなざしを自分の前に立てておられるイエスキリストに集めたのです。彼は今までの人生と違って始めて、自分のまなざしが変わりました。それがその病人が立ち上がる始まりとなったのです。最近、みなさんはどちらへみなさんのまなざし、心を向けているのですか。自分自身に、他の人に、あるいは、他の何かのものに、みなさんの人生の

まなざしを変えないままのところへずっと向けさせたままで、繰り返し続けられている苦しみから、なかなか解放されず、立ち上がれないの自身の姿はないでしょうか。もう以前から相変わらずに、ずっとみなさんの前に来られ、立てておられ、待てておられる主にまなざしを変える必要はありませんか。

### <② 先に訪ねて来て下さる救い主イエスキリスト>

ヨハネの手紙第一4:10、19節によると、「10私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。19私たちは愛しています。神がまず私たちを愛して下さったからです。」

スコットランドの J.G スモール先生は苦しんでいた自分にもあの38年の病人の人と同様に先に尋ねて来て下さったキリストの愛と御恵みを覚えて、感謝の賛美を作りました。

それが聖歌493番の曲です。「1わがとも主イエスはわれを見出し・引き寄せ給いぬ・愛の糸もて・御側(みそば)に待(はべ)れば・何をか恐れん・今主はわがもの・われは主のもの！2わが友 主イエスは 罪あるわれを 贖(あがない)給えり 命を捨てて この身と魂(たま)をば 主よ取り給え 全ては汝(な)がもの わがものは無し 3わが友 主イエスは いとも優しく 慰(なぐさ)め励まし また守り給う悩みも剣(つるぎ)も 飢えも裸(はだか)も 引き裂(さ)く能(あた)わじ 主よりわが身を」

傷だらけのサマリアの女にも、愛する息子をなくし悲しまれたナインの未亡人にも、悪霊にとらわれ苦しんでいたマクダラマリアにもイエス様はまず！先に！彼らのところに行かれ、どうしても、悲しくて、苦しくて、勇気も、力もないその絶望の場から立ち上がれるように愛をもって信仰を与え、勇気と癒しと力を与え、真の回復を与えて下さいました。

その救い主イエスキリストが今日、今も、苦しみ、傷を負って悩んでいるみなさんにすでに、先に、尋ねて来て下さっています。そして、主の愛で癒やしの御手を差し延べておられることをぜひとも忘れないで下さい！！

ヨハネの黙示録3章20節「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開(あ)けるなら、わたしは、その人のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」みなさんの心の扉を主に開き、迎え入れて、みなさんに差し伸べて下さる主の救いの御手を、命の御手を！回復の御手をつかむように待っておられます。

### <③ すでにすべてを知っておられるイエスキリスト>

病でどれほど苦しんで来たのか、彼の全ての痛みをイエス様はすべてご存知でした。(6節以下)

「イエスは彼が横になっているのを見て、すでに長い間そうしていることを知ると、彼に言われた。「良くなりたいか。」今イエス様は苦しみの中うめきながら寝込んでいた38年間のこの病人の前に立って、彼を見つめておられます。この病人が今までどれだけ苦しみと痛みの時を過ごして来たのか、どれだけ死ぬほど寂しく、悲しい時を過ごして来たのかイエス様はすべてをご存知、彼の人生を慰めて下さいました。

6節の中「すでに長い間そうしていることを知る！」だと書かれています。だれもこの病人の苦しみについて知ろうとも、誰一人自分の苦しみと痛みを知る人もいないと思ったこの病人にイエス様はついに話しかけておられます。「よくなりたいか！」この言葉はだれもがたやすく言える言葉では決してありません！この世のどんな名をはせる名医(めいいい)だとしても、自分が自らそう言える人はいません。薬を飲んだり、病に合わせた治療を受ければ良くなるか、悪くならないように教えたり、助けてくれるのが医者(いしゃ)の人の力の限界でしょう。医者自分自身がすべての病を癒やせる力を持ってそのように言える人はだれもいません。人が、いくら、今の時代が革命的な先端科学や医学の技術が発達され持っていると言っても、今年特に、新型コロナウイルスという一つのウイルスによって、どれほど、世界を一瞬に苦しみ続けながら、改めて人の医学の力と知識の限界をよく学ばされているのではありませんか。

“よくなりたいか”この御言葉を言える方はただ神様のみです。この言葉の意味はつまり、“完全に癒やされたいのか、立ち上がりたいのか、回復されたいのか、救われたいのか、解放されたいのか”という根本的な命の救いと回復へのお言葉でした。

私は個人的にこの御言葉の本当の力を体験したことがあります。何回も証しましたが、私が神学校の伝道師の時、内の父と母はみんな癌でものごとく大変だった時があります。父親は皮膚癌で、3回手術を受けてやっと回復されたと安心したら、ずっと看病し続けて来た母親が次はもっと深刻な血液癌で約1年間ずっと重病患者室で入院され抗癌剤治療を受けられました。入院された病院はブサンで一番癌専門病院でしたが、完治率がただ30%ぐらいだけだと診断され言われました。血管を通して癌細胞が転移されてしまうともうそれで終わりの危険な状態でした。

一生涯いろんな大変な仕事もやりながら、父親のため、我々子とも3人のため苦労ばかりされて来たわが母親のため、断食の祈りをはじめ、祈るたびに涙が止まりませんでした。ある日早天祈り会の時、頂いた主の御言葉が今日のこの御言葉でした。38年間苦しんで来た人の人生がまるでうちの母親の姿のようでした。

そして、“よくなりたいか”この御言葉を主が母親に語る御言葉として信じ受け止め、“はい、主よ。そうなりたいです。主よ。主の栄光の表すために、もう一度の人生を母親に下さい！”と切に祈りました。そして、母親にも分かち合い、母親ご自身からもそう祈るようにすすめ、母親も毎日切に主に命をすべて委ねつつ祈りました。

神様はその願いと祈りに聞いて下さってもう25年ぐらいの年月が経ち、今もお元気で教会でのお仕事を両親ともに感謝しつつなさっています。

今みなさんにもそれぞれさまざまな問題や苦しみ、悩みに抱えているでしょう。今日も同じく、イエス様は私たちの病気、傷、悩み、罪などが長い間のことをご存知で、我々の前に立てて癒やして下さいとのお方です。

この主の御声に心からイエスキリストを信じ、答えて見ませんか。“よくなりたいか！よくなりたいか。”、“アーメン！主よ。本当によくなりたいです。主よ。どうか私を助けて下さい。わたしを直して下さい。回復してください。癒やして下さい。許して下さい！そして、もう一度神の栄光を表す者として、立ち上げられるように力づけて下さい。”と心から主に告白し、打ち明けて見て下さい。もし今自分が何か苦しんでいると、弱り張っていると、何か神の助けや癒し、回復の恵みが必要な時に、今日のこの主の御言葉を抱いて祈って下さい。主は自分の弱さと限界と認め、本当に主を信じ、心から主に委（ゆだ）ねる人に主が癒やし、回復されてついにその場で立ち上げられ踏み出して前進して行けるように恵みの力を注いで下さると信じます。

### <まとめ>

愛するクリスチャンプレイズチャーチのみなさん！今日その苦しみは病人に永遠に失敗した人生を与えたものではありません。かえてその苦しみと痛みによってイエス様に会える祝福の機会となったではありませんか。だれとも、どんな人でもイエス様は会ってくださいます。主はイザヤ預言者を通して旧約時代から今日も我々に仰せられます。

イザヤ書55章6節「主を求めよ。お会いできる間に。呼び求めよ、近くにおられるうちに。」

愛するみなさんはどうですか。今も自分を苦しませる環境ばかり見つめながら座り込んでいませんか。自分を苦しめている方向ばかりに向けずに、みなさんを今も相変わらず愛し、みなさんのため来られ待てておられる、イエスキリストを見上げて生きましょう。イエスキリストは私たちを神の愛から決してみ捨てることのないお方であることを忘れないで下さい。「(ローマ人への手紙8章32節)私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。」

愛するみなさん！イエスキリストに頼り、信じる者はどんな場合にもかならず立ち上げられます。11月が始まりました！始まったこの11月中にも主にあって一人一人が改めて主に立ち向かい、主の回復させる御力によって立ち上がる感謝の証しの今月となりますように主イエスキリストの御名によって祝福し、お祈り申し上げます。アーメン！